



日本出土のイスラム陶器

I はじめに

「鴻臚館」遺跡の発見 昭和62年(1987)

II 「鴻臚館」とは

大宰府鴻臚館と博多津鴻臚館

III 「鴻臚館」遺跡の遺構と遺物

IV 日本出土のイスラム陶器

(1) 「鴻臚館」遺跡と北部九州の出土遺跡

(2) 畿内の出土遺跡

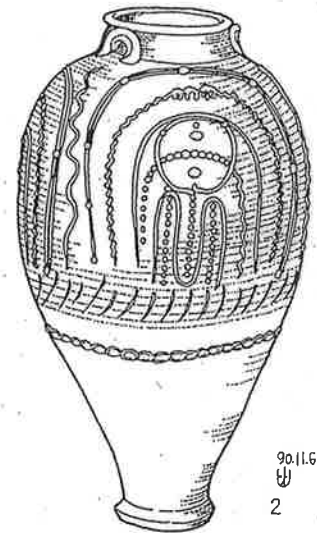
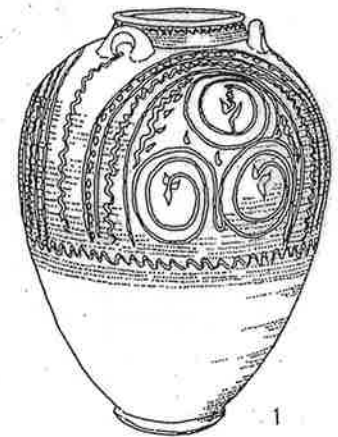
(3) 平城京西大寺旧境内出土のイスラム陶器

唐使・皇甫東朝の関与

福建省福州市・閩国劉華墓出土のイスラム陶器

V おわりに

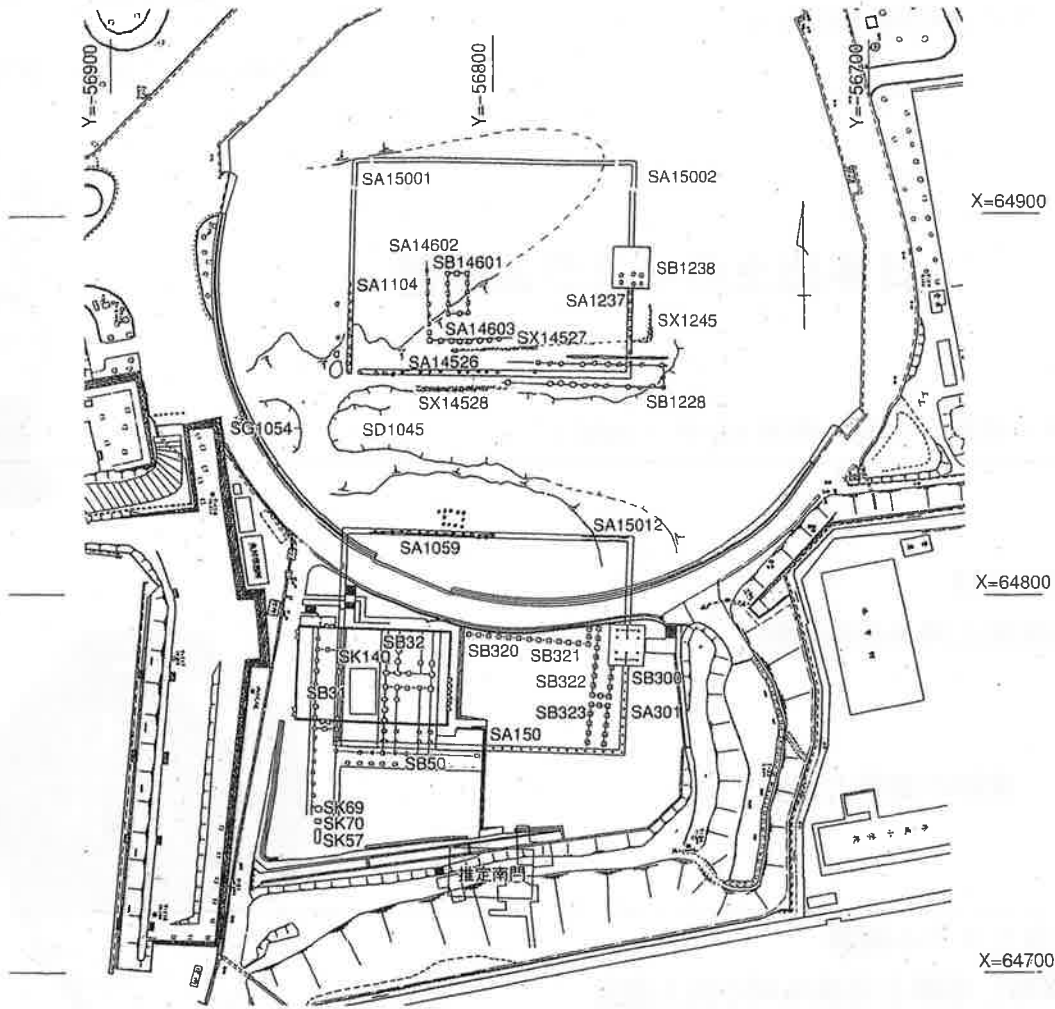
大宰府と海のシルクロード



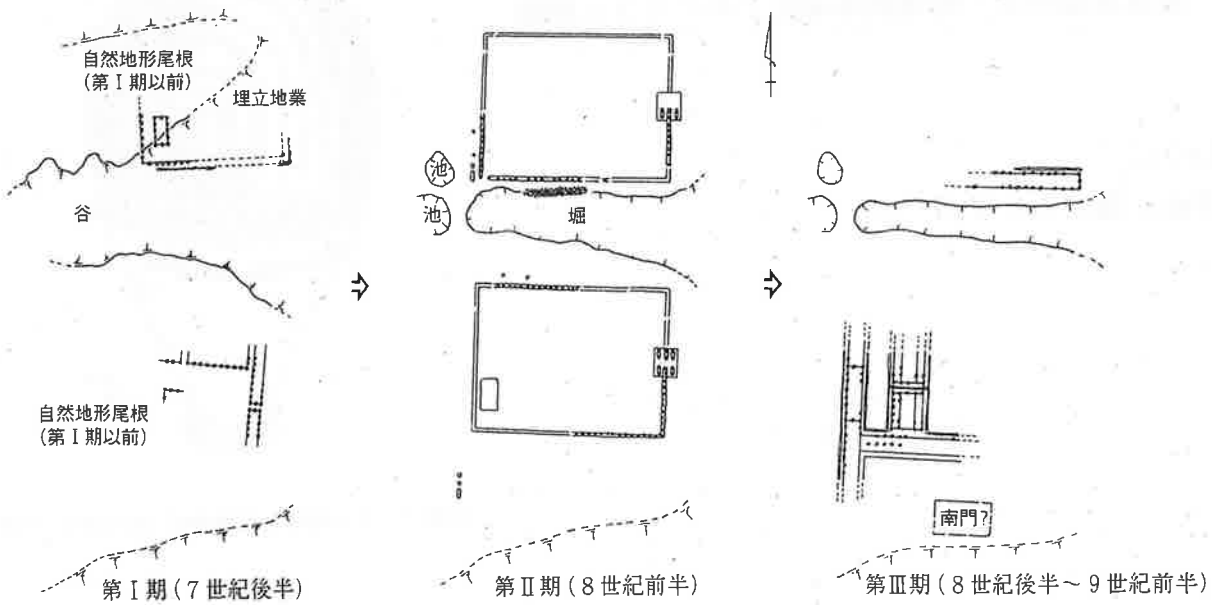
初期イスラム陶器大壺復原図 (山本信夫 作画)

【お知らせ】

次回の館長講座は4月14日(日)13:30~(2時間程度) 講義室にて開催いたします。

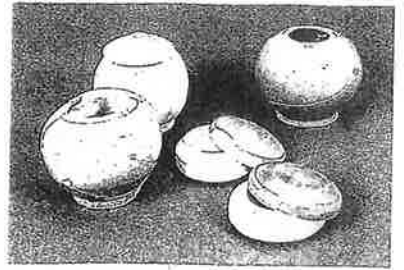
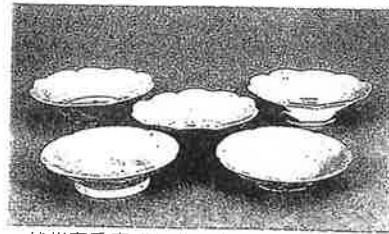


鴻臚館跡検出遺構概念図 (1/2000)



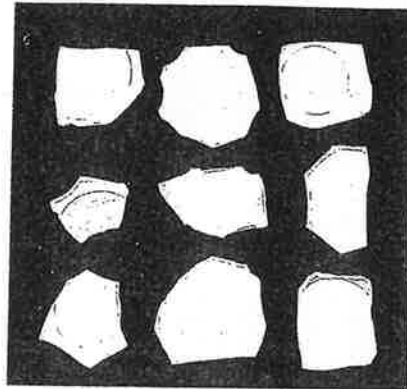
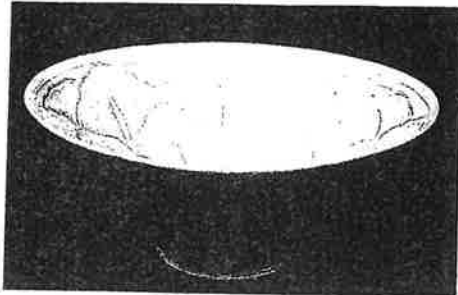
鴻臚館跡建物遺構模式変遷図

福岡市教育委員会, 2004 『鴻臚館跡 14』



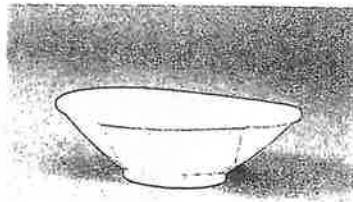
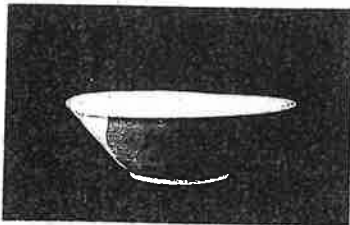
越州窯系青磁輪花皿(唐末~五代)

越州窯系青磁小壺と合子(五代)



越州窯系青磁花文碗(五代~北宋)

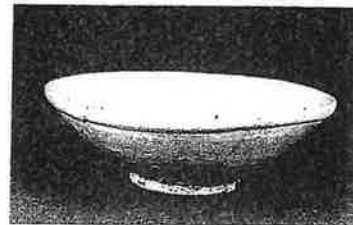
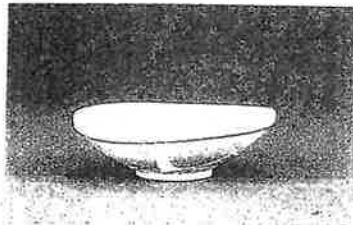
越州窯系青磁草花文・花文碗破片
(五代~北宋)



邢窯系白磁碗(唐)

邢窯系白磁碗(唐)

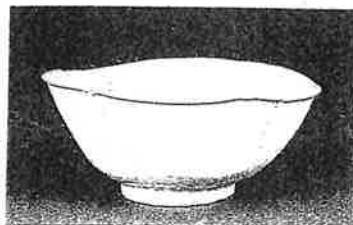
邢窯系白磁碗(唐)



白磁陽刻蓮弁文碗(唐末~五代)

邢窯系白磁碗(五代~北宋)

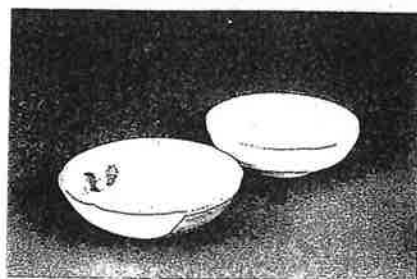
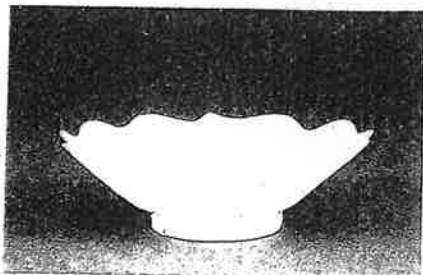
白磁碗(北宋)



白磁碗(北宋)

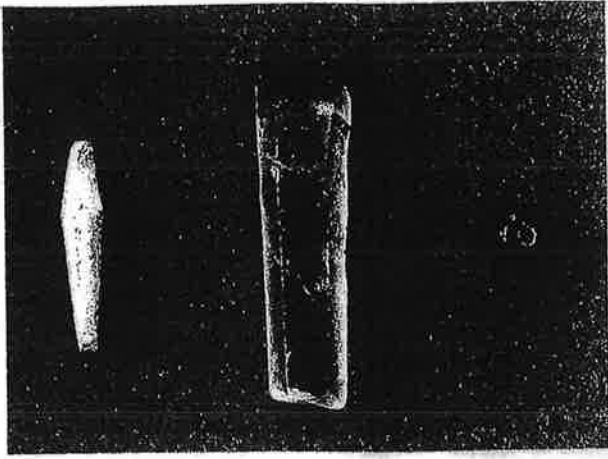
白磁五輪花碗(北宋)

白磁碗(北宋)



定窯系白磁蓮花碗(五代)

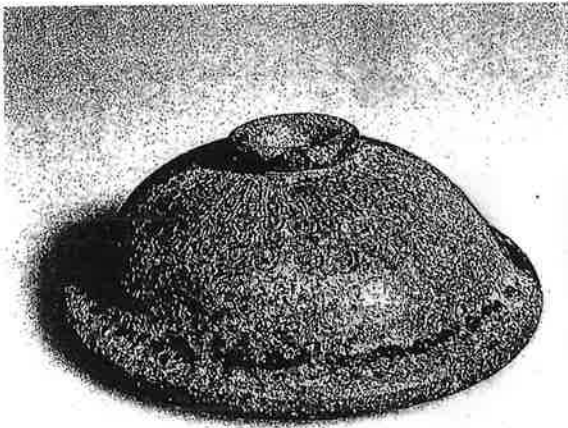
白磁皿(北宋)



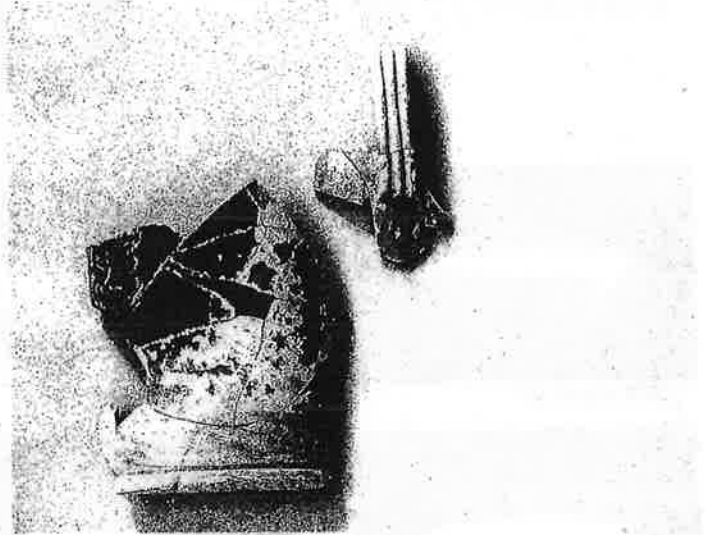
SD1216出土鎮壇具



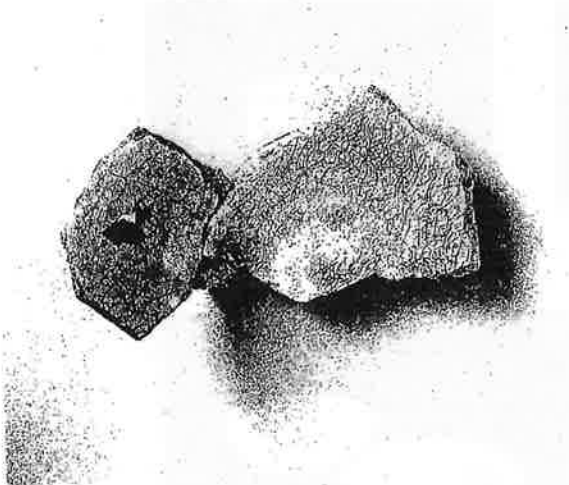
SP14258出土砂金



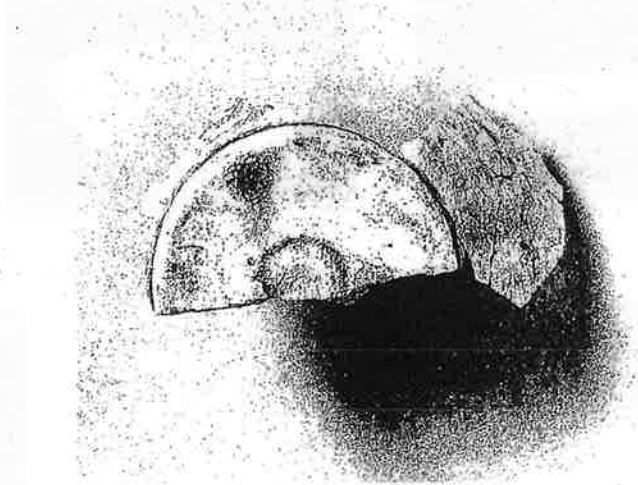
SX14528出土新羅陶器蓋



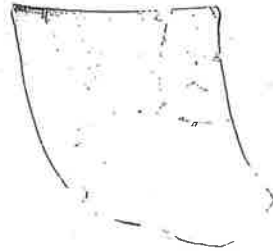
SK14271出土長沙窯水注



広東青磁碗 上面 (Fig. 90-3)

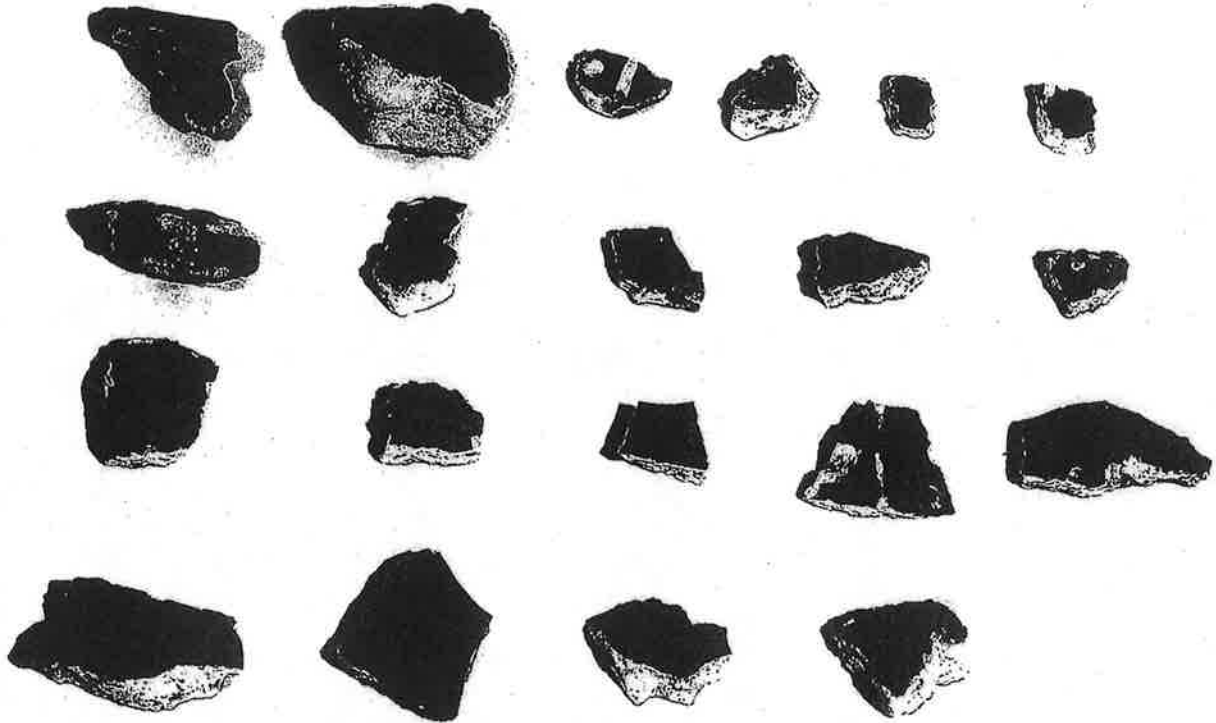


広東青磁碗 底面



44

45



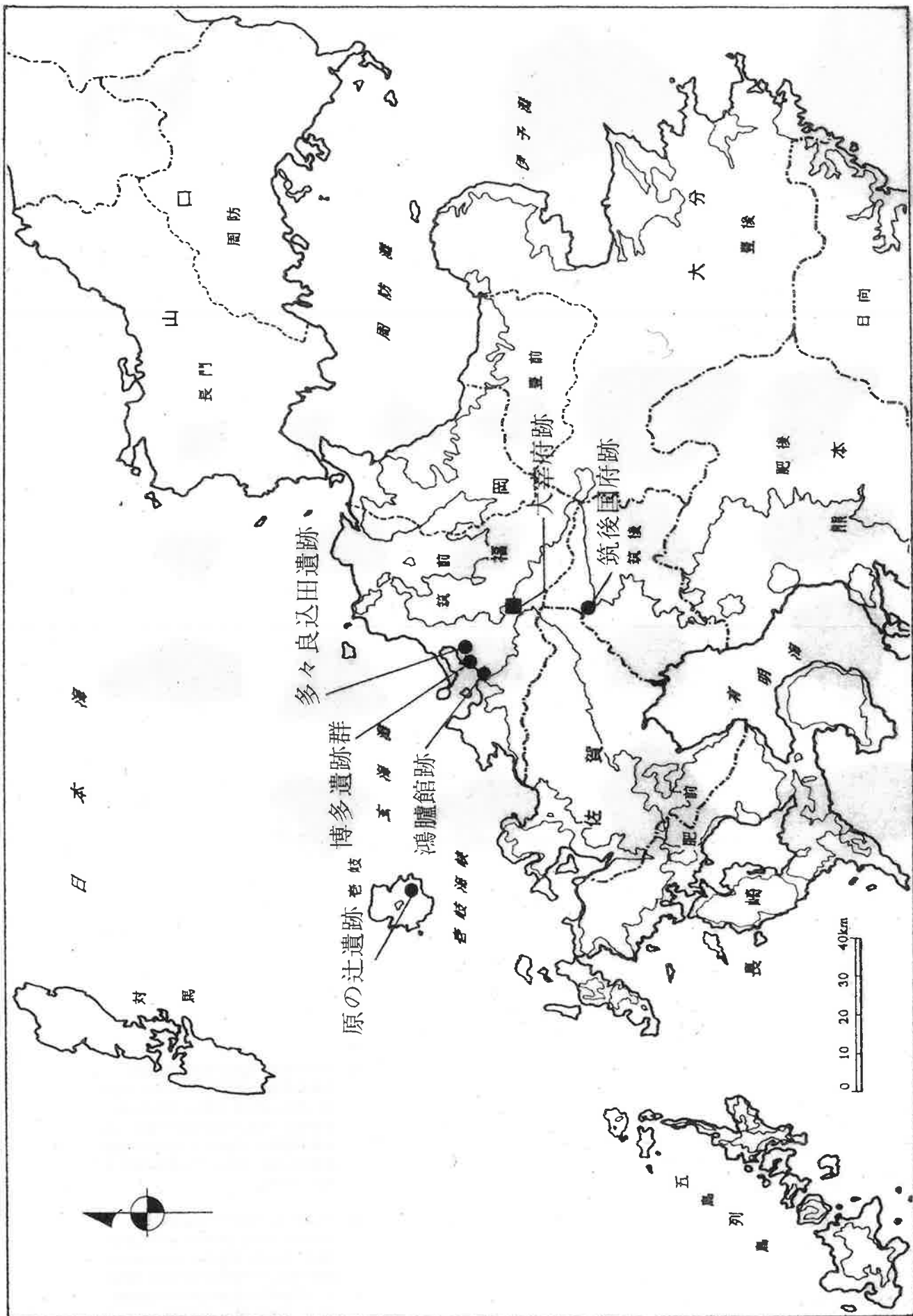
44

44-イスラム陶器／福岡市中央区鴻臚館跡

外面の青緑色で透明度の高いガラス質の釉と、明るい黄灰色で細かい穴の多い胎土が特徴的である。外面には線や円などの貼付文が装飾として施される。これまでに鴻臚館跡からは数十点のイスラム陶器の破片が出土している。

45-ガラス杯・瓶／福岡市中央区鴻臚館跡

イランやシリアなどで作られたイスラムガラスである。右は淡い青緑色のガラスで瓶の口縁部である。やや器壁は厚手であり、器形はまっすぐ延びた口頸部にふくらんだ胴の付くフラスコ形と思われる。左は無色のガラスで杯の口縁部である。器壁は1mm以下の薄手であり、器形は楕形もしくはワイングラス形になるとみられる。

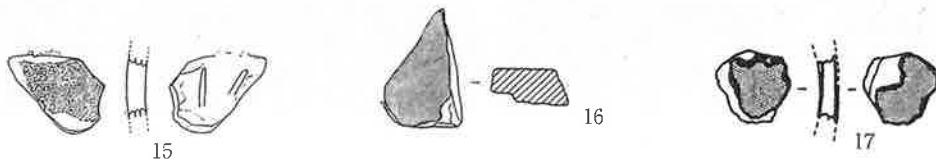
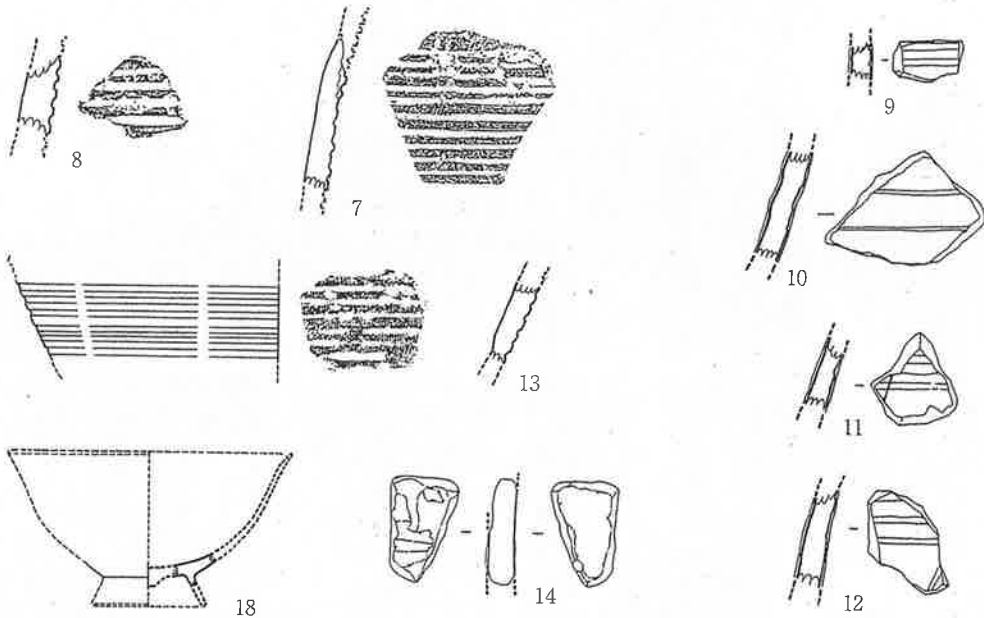
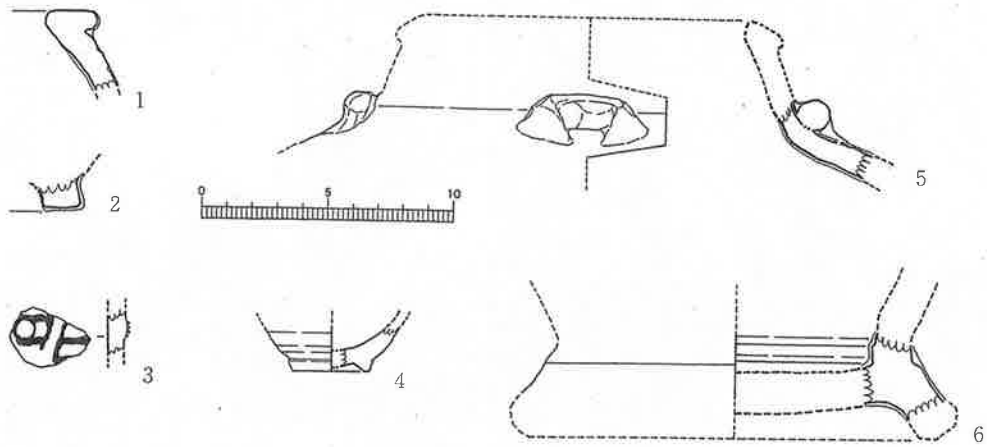


北部九州、初期イスラム陶器出土分布図

山本信夫, 2002 「日本・東南アジア海域における9~10世紀の貿易とイスラム陶器」
 福岡県歴史民俗博物館研究報告 第94集

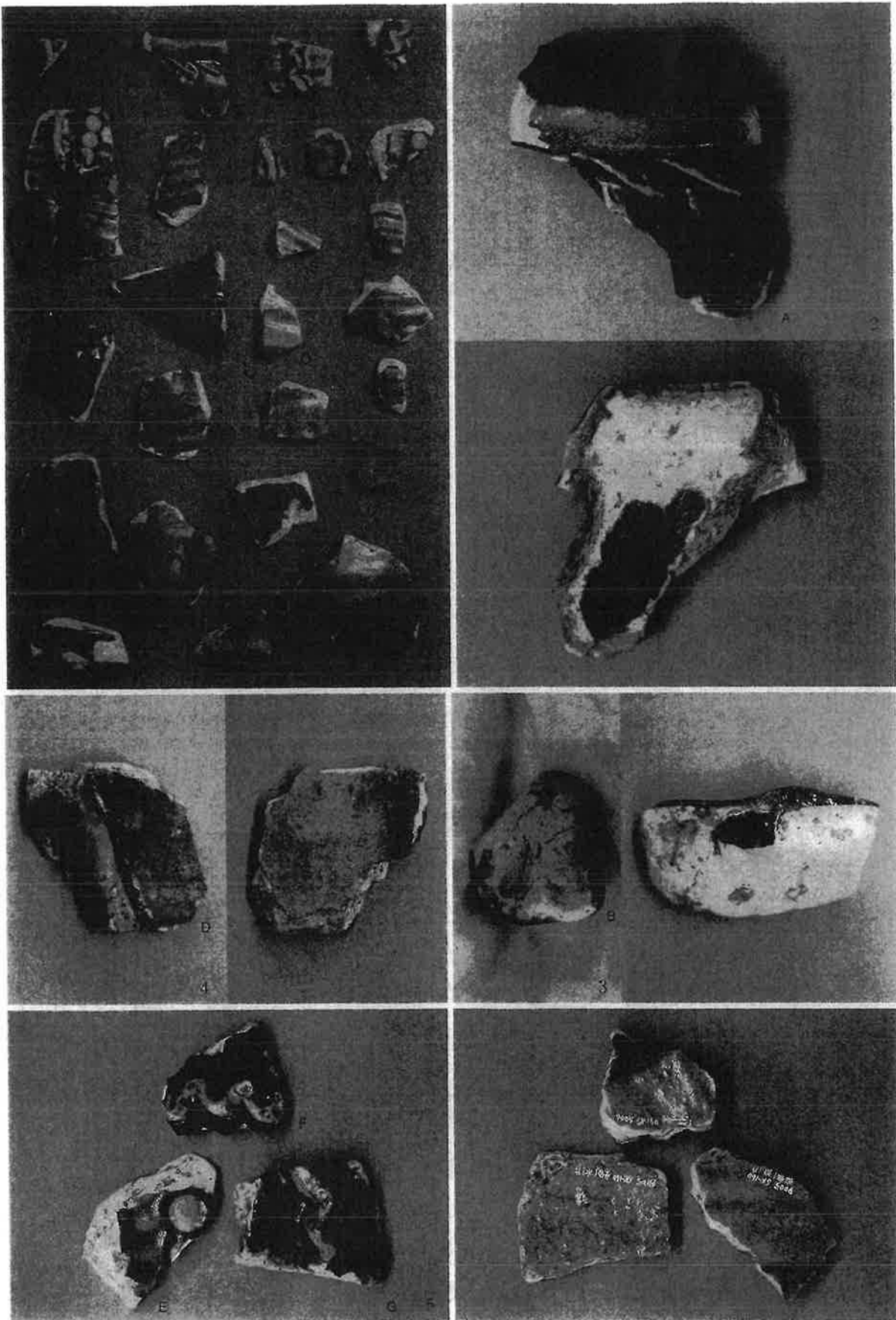
遺跡名	調査年	文献
大宰府条坊跡第19次	1981	『大宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市教育委員会 1984
大宰府条坊跡第34次	1982	未報告
大宰府条坊跡第81次	1989	未報告
筑後国府跡第69次	1986	『筑後国府跡』久留米市教育委員会 1987
筑後国府跡第86次	1989	『筑後国府跡・国分寺跡』久留米市教育委員会 1990
福岡市多々良込田遺跡	1983	『多々良込田遺跡Ⅲ』福岡市教育委員会 1985
鴻臚館跡昭和62年度調査	1987	『鴻臚館跡Ⅰ』福岡市教育委員会 1991
鴻臚館跡平成2年度調査	1990	『鴻臚館跡Ⅰ』福岡市教育委員会 1991
博多築港線第1次	1982	『博多』（築港線Ⅰ）福岡市教育委員会 1988
博多築港線第3次	1985	『博多』（築港線Ⅲ）福岡市教育委員会 1989

太宰府市教育委員会, 1995 『大宰府条坊跡Ⅶ』 『大宰府市の文化』 第28集



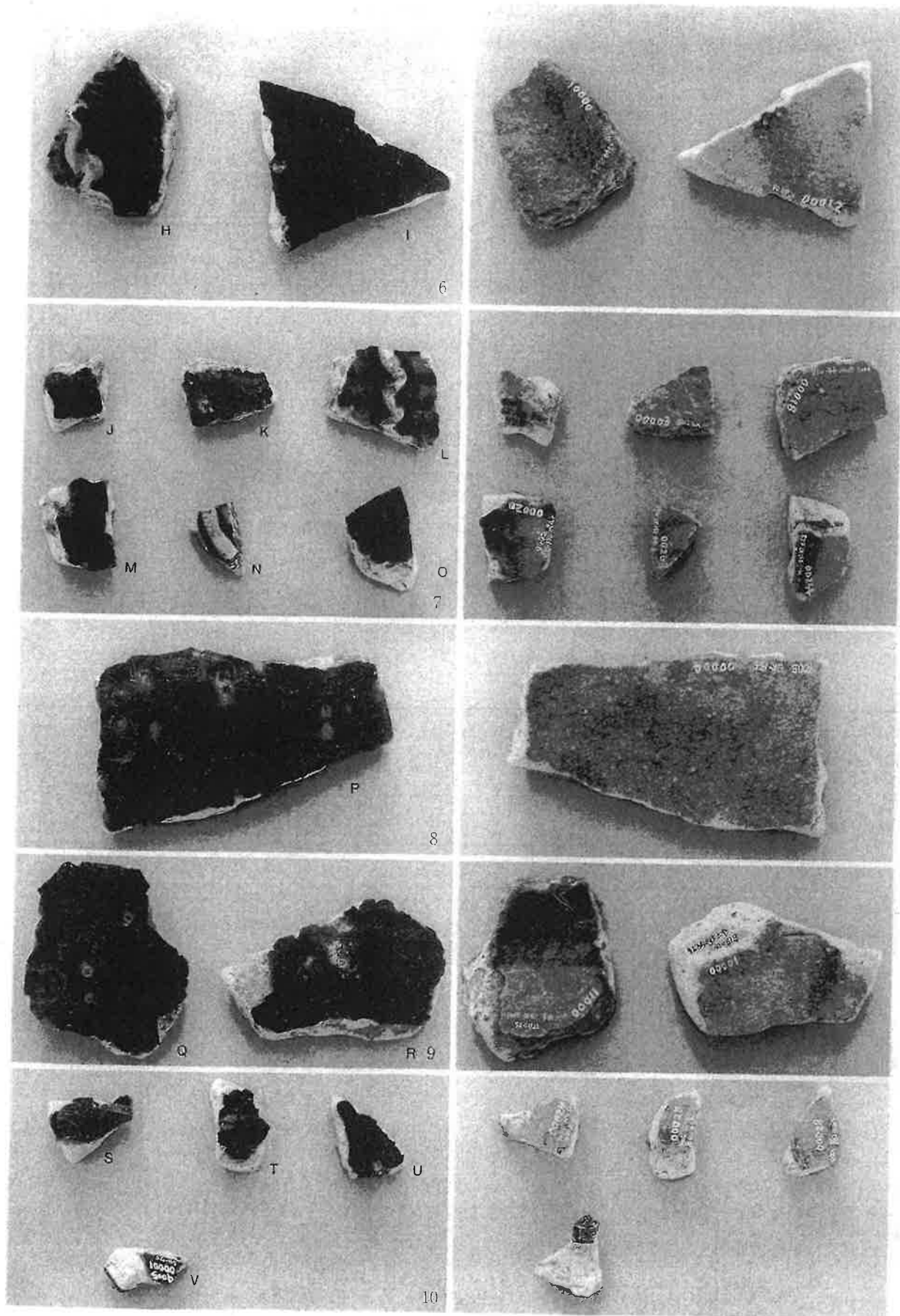
上段, 福岡市内 中段, 大宰府条坊跡 下段, 筑後国府跡 1・2は略図

山本信夫, 2002 「日本・東南アジア海域における9~10世紀の貿易とイスラム陶器」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第94集

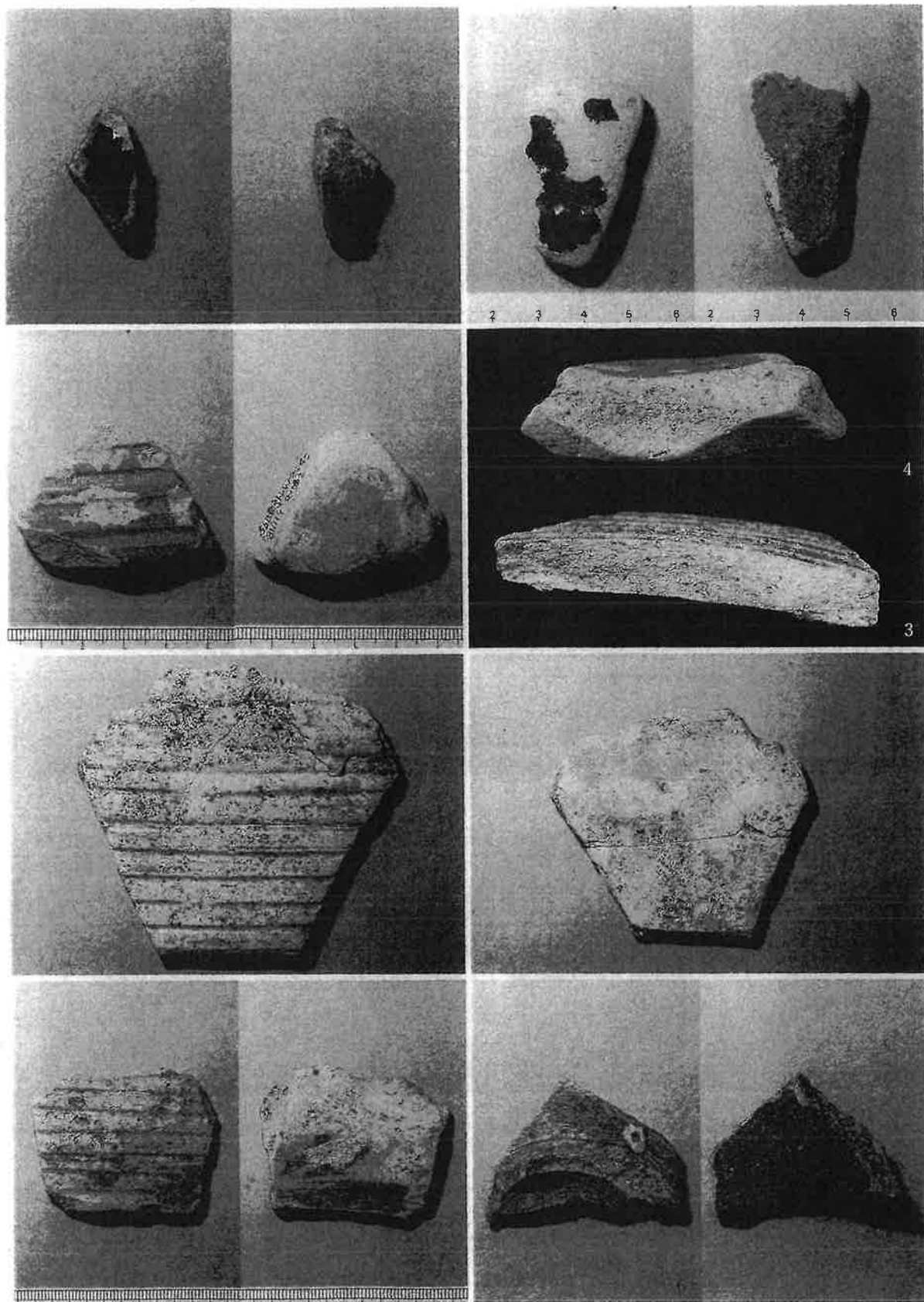


鴻臚館跡1 (「鴻臚館I」福岡市教育委員会 1991より)

山本信夫, 2002 「日本・東南アジア海域における9~10世紀の貿易と
 イスラム陶器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集



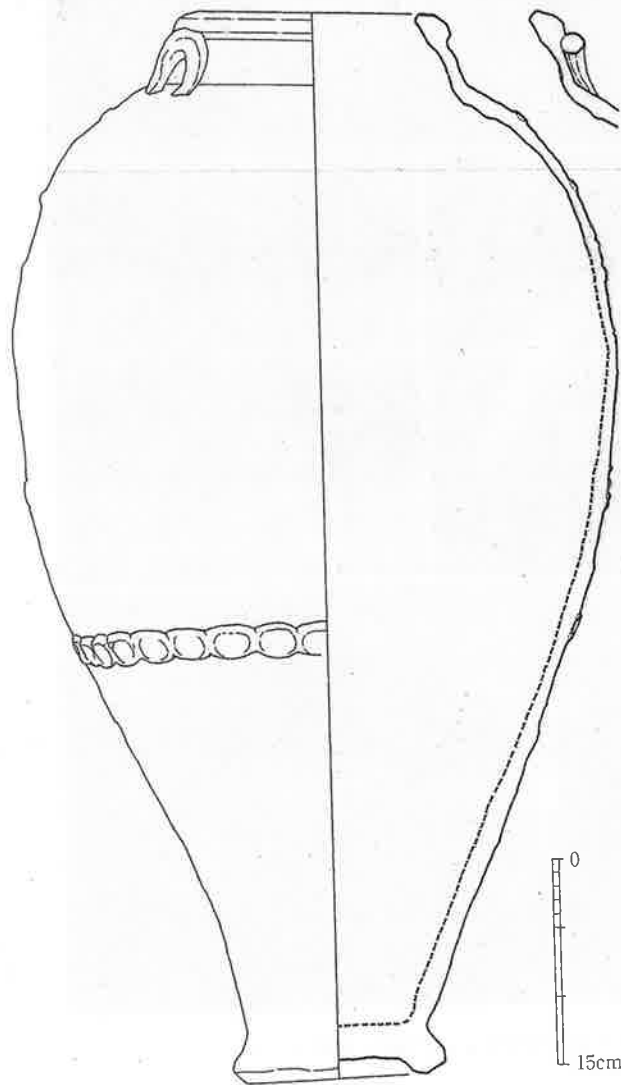
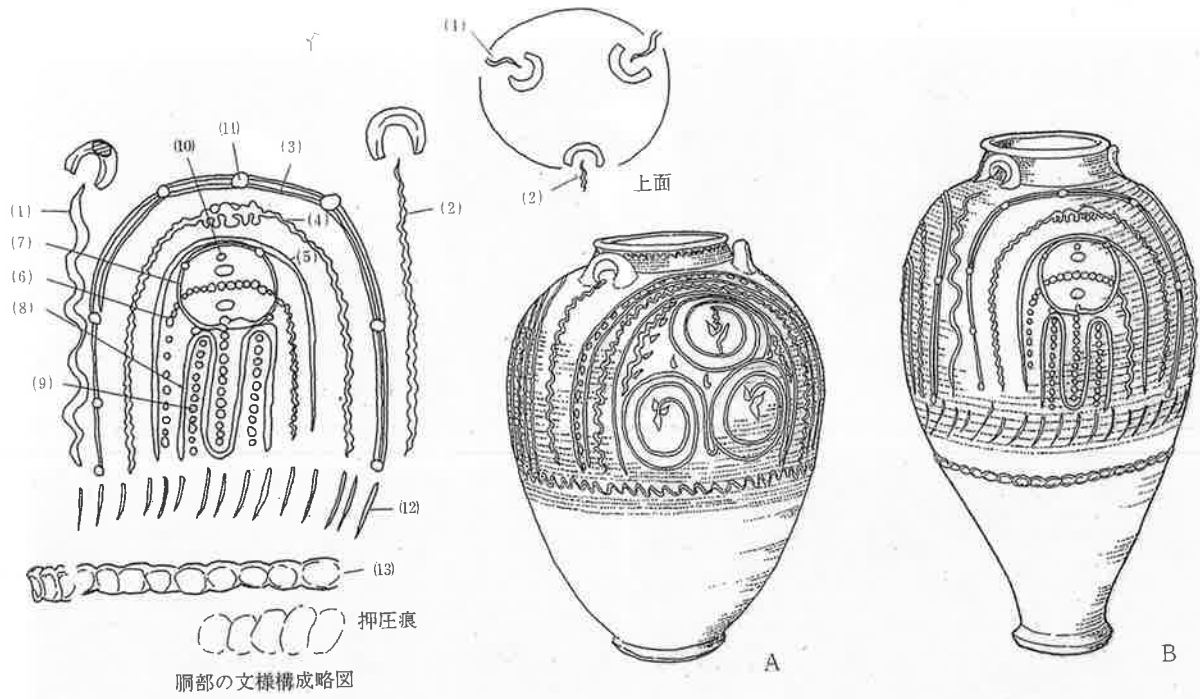
鴻臚館跡 2



大宰府条坊跡 1 (第81次調査) 2 (第194次調査) 3・4 (第19次調査) 5 (第149次調査)
 太宰府天満宮 6 (第1次調査)



1 (多々良込田) 2・3 (博多, 2は「よみがえる中世1」平凡社 1988 より)
 4 (田村) 5 (原の辻) 6 (筑後国府跡)



初期イスラム陶器 (写真「ペルシャ陶器七千年の歩み」1978より)

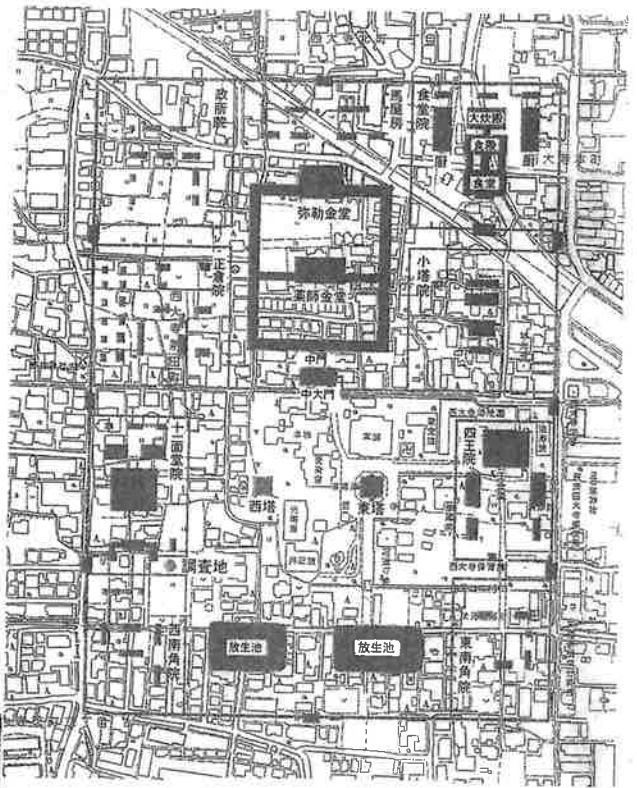
山本信夫, 2002 「日本・東南アジア海域における9~10世紀の貿易とイスラム陶器」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第94集



東西溝木屑層出土「皇浦（甫）東朝」銘墨書土器
 (撮影：奈良文化財研究所 中村一郎氏)

森下恵介・久保邦江, 2011「西大寺旧境内(第25次)」

出土したイスラム陶器片(3日、奈良市埋蔵文化財調査センターで) —永井哲朗撮影



西大寺伽藍想定図

『奈良県調査』、『日本考古学』第3号



奈良市教委提供
 (資料をもとに作成)

イスラム陶器 ササン朝ペルシャ(3~7世紀)で作られた陶器の流れをくみ、イスラム化後の西アジアや中央アジア、北アフリカなどで焼かれた軟質の陶器。8世紀頃に生産が始まったとされる。

●出土したイスラム陶器の復元イメージ



イスラム陶器の破片が出土した西大寺旧境内の溝(奈良市西大寺新田町) — 奈良市教委提供

2009年7月4日付『読売新聞』

武天皇 天平8年 (736)

徳天皇 天平神護2年 (766)

徳天皇 元平 (767)

八月二十三日 遣唐副使・従五位上の中臣朝臣名代らが唐人三人・ペルシヤ人一人を率いて、帰国の挨拶のため天皇に拝謁した。

十一月三日 天皇は朝殿に臨御し、詔して遣唐副使・従五位上の中臣朝臣名代に従四位下を授けた。死没した判官・正六位上の田口朝臣養年富・紀朝臣馬主にはそれぞれ従五位下を贈り、准判官・従七位下の大伴宿禰首名・唐人の皇甫東朝・ペルシヤ人の李密翳らにはそれぞれ身分に応じて位階を授けた。

従五位下の李忌寸元環に従五位上を、正六位上の袁晋卿には従六位上を、皇甫東朝・皇甫昇女にはそれぞれ従五位下を授けた。これらの人は、法華寺での舍利の法会に唐楽を奏したからである。

三月二十日 従五位下の巨勢朝臣苗麻呂を少納言に任じ、従四位下の阿倍朝臣息道を中務大輔に任じ、侍従はそのままとした。従五位下の石川朝臣清麻呂を中務少輔に任じ、従五位下の賀茂朝臣大川を大監物に任じ、従五位下の文室真人忍坂麻呂を右大舍人頭に任じ、従五位下の石上朝臣真足を内匠助に任じ、従五位下の粟田朝臣公足を内匠員外助に任じ、従五位下の浄原王を内礼正に任じ、従五位下の紀朝臣広名を式部大輔に任じ、従五位下の藤原朝臣小黒麻呂を式部少輔に任じ、従五位下の皇甫東朝を雅楽員外助に任じ、花苑司正（花卉や園池の業務を司どったものか）を兼任させた。

2016.10.5 (読売)

平城宮 ペルシヤ人登用

8世紀木簡に役人「破斯」

奈良市の平城宮跡から出土した8世紀中頃の木簡に「ペルシヤ」(現代のイラン付近)を意味する「破斯」という名字を持つ役人の名前が書かれていたことが、奈良文化財研究所の調査でわかった。国内でペルシヤ人の名前を記した出土遺物が確認されたのは初めてで、奈良時代の日本の国際性を裏付ける成果となる。

木簡は1966年、人事を扱う式部省があった平城宮跡東南隅の発掘調査で出土した。文字が薄く肉眼では一部が判読不能だったが、今年8月、赤外線撮影をした結果、役人を養成する「大学寮」でのペルシヤ人役人の宿直に関する勤務記録とわかった。

表側の上部に「大学寮解申宿直官人事」、下部に定員外の特別枠で任じられた役人「員外大属」という役職名、中国語でペルシヤを表す「波斯」と同じ読み・意味の「破斯」という名字を持つ「破斯清通」という人名と、「天平神護元



年(765年)」という年号が書かれていた。

「続日本紀」には736年、遣唐使が「唐の人三人、波斯一人」を日本に連れ帰り、聖武天皇が会ったと記されている。

奈良文化財研究所の渡辺晃宏・史料研究室長は「明治のお雇い外国人のように、新しい文化や学問を教える役割を担っていたのではないか」と話している。

木簡は同研究所平城宮跡資料館(奈良市)の「地下の正倉院展」(15日～11月27日、月曜休館)で11月1～13日、展示される。



※□は判読不能

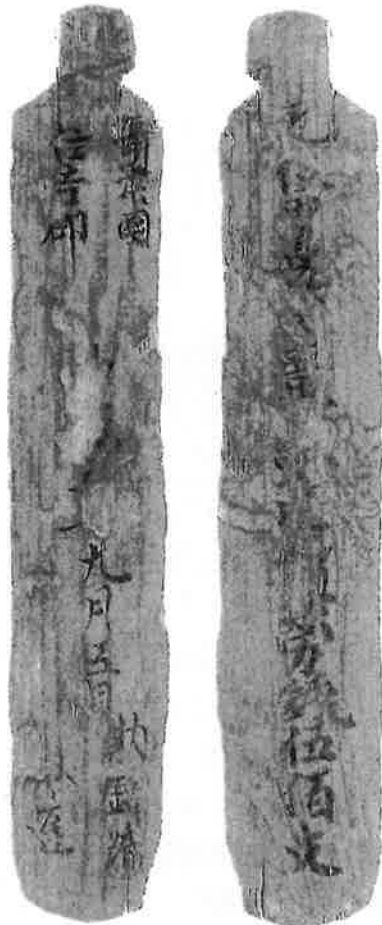
平城宮跡で出土した木簡(左)。ペルシヤ人とみられる名前が書かれていた。奈良文化財研究所提供

式部省木簡の広がり

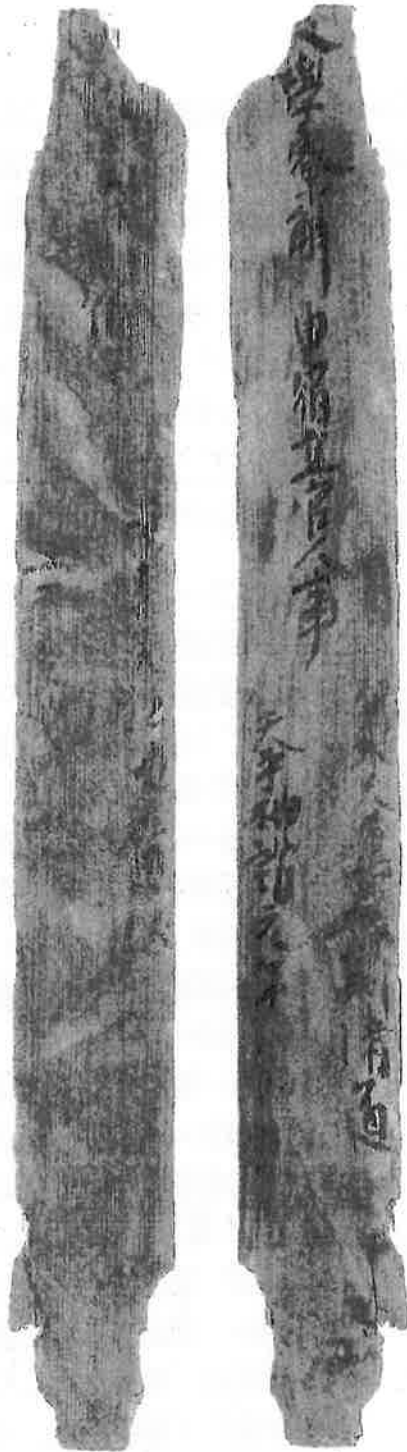
東西溝SD四一〇〇から見つかった式部省木簡には、勤務評価だけでなく、式部省のさまざまな仕事に関わる木簡が含まれている。



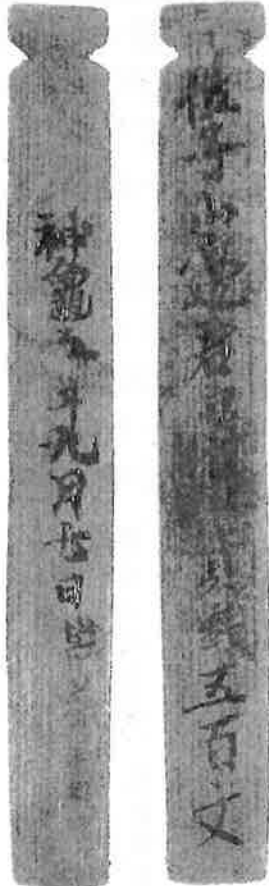
赤外写真（拡大）



116



128



146

東西溝SD四一〇〇から見つかった木簡の大半は、I・II章で紹介した勤務評価の事務作業に伴うものだが、それ以外にもいくつかの特徴的な木簡がある。いずれも式部省ならではといつてよいものである。

第一は式部省管轄下の役所からの勤務分担（日勤が直、夜勤が宿。あわせて宿直とも呼ぶ）の報告。128は大学寮（役人養成機関で、左京または右京の三条一坊にあつたらしい）のもの。員外大属（定員外の第四等官）が担当したことを記す。天平神護元年は七六五年。姓の破斯はベルシャのこと（普通は波斯と書く）。西域から渡来した人の子孫であろうか。

第二は続勞錢（資錢）の付札。勤務評価の対象となるには一定の出勤日数が必要だったが、五〇〇文（和同開珎五〇〇枚）の錢を納めることでこれに代えることができた。その錢を続勞錢と呼ぶ。労働者一日分の日当が一文だから相当の額だが、資力のあるものにはこうした抜け道も許されていた。

福州市の市街から北に8kmに東室山と西室山という山が並ぶ。その墓はこの東室山の西南側斜面、地名でいえば福州市晋安区新店鎮戦坂村から、1965年2月に道路工事のうちに発見された。墓からやや西の二つの山の中間には閩国を創始した王審知の陵墓(932年)があり、一帯は王氏一族の墓葬区になっていた。

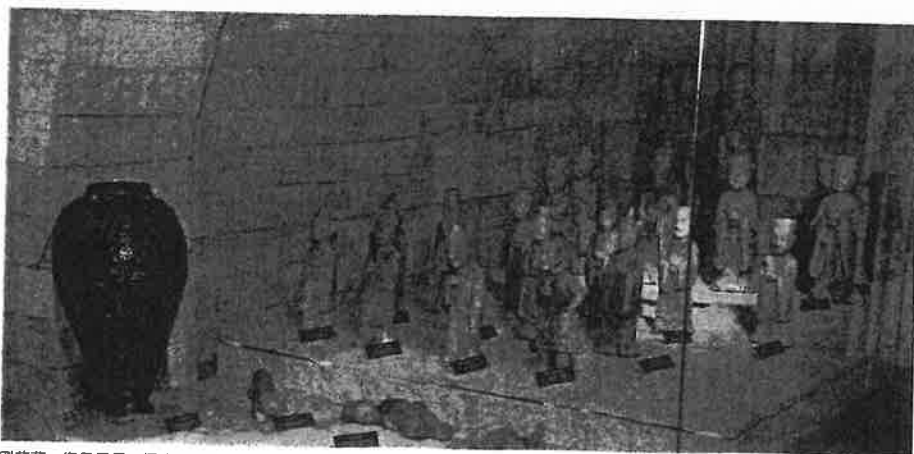
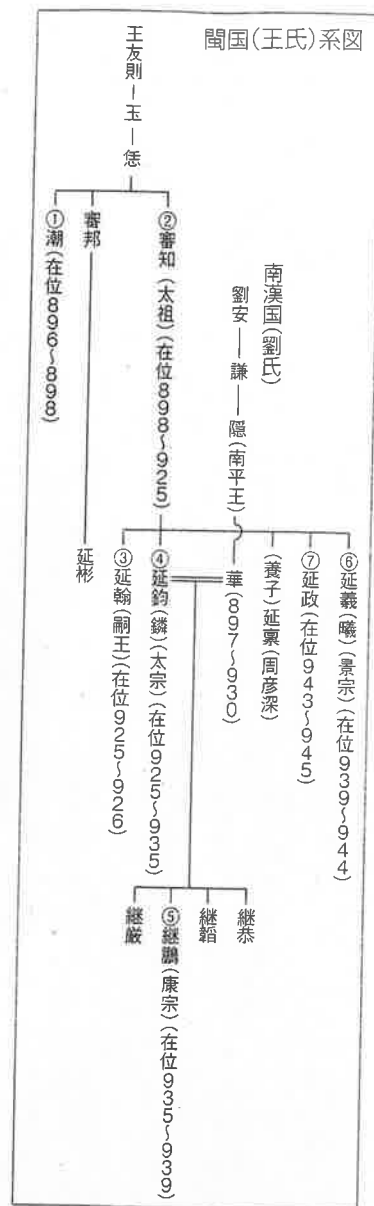
墓は斜面を5層に階段状にした最上層の平地に、二つ並んで築かれた墳丘の一つの地下にあった。墓室は花崗岩をレンガ状にしてアーチ形に組み、前室と後室を造り、全長が8.4m、幅が2.5mで高さが3m弱という規模の大きいものであった。これに前に長さ約4mの墓道が、後室には最奥に墓誌を納める龕と床中央に掘った腰坑がつく。

これほどの規模の墓を作らせた墓主は誰か。それは発見された墓碑ともまごう大型墓誌(高さ155×幅97cm)によって明かにされる。すなわち墓主は劉華(字は德秀)、広州に拠点を置く南漢を創始した南平王劉隱の次女で、22歳の918年(貞明4年)、王審知の次男の王延鈞に嫁ぎ、930年に34歳で世を去った。典型的な政略結婚であろうが、彼女はその12年間に6人もの子(男4人、女2人)を儲け、926年には夫がクーデタで第3代閩国王についた。このことからみて劉華はずっと夫に寄り添い、背後から行動を支えたのではないか。福建で発掘された100基を越える隋唐五代墓のなかで一際光る存在感は、こうした事情と無縁ではない。

墓は早くに盗掘され、目ぼしいものは失われていたが、それでも注目すべき副葬品が残されていた。一つは3点の青釉四耳壺(作品1)、高さは70cmを越え、その器形、釉色、腹部の文様のものは同時期のイラン(ペルシア)にも存在し、ペルシア(波斯)からの輸入品と推定される。彼女の実家筋からの持ち込み品かもしれないが、当時の海を通じた西方との交流を示す貴重な一品である。

また墓からは、43点の陶俑がみづかり(女俑8点、男俑28点、他7点)、大きいもので1m前後もあった。女俑は豊満な体躯に高く結った髻、袖の広く足元までとどく外衣を着、両手を胸の前であわす(作品7)。男俑も同様で、普通の幞頭帽をかぶるもの以外に、王冠状帽子(作品6)や道士帽などをかぶり、ゆったりと衣服をまとう。その容姿と雰囲気は唐の特徴を残しつつ、次の宋代や南の地方性に繋がるものが認められる。他にフードつきの外衣をつけた老人俑があり、顔つきはどちらかというと西方系、馬坑山の五代墓の人物俑(作品8)と似ている。

さらに俑には馬坑山墓とつながる十二生肖俑があり、唐代からは確認できない四神俑(作品2、作品3)や鬼神俑(作品4、作品5)など多彩である。こうしたところから劉華墓が唐と宋の特徴を混在させた過渡的位置にあったことが明らかにされる。

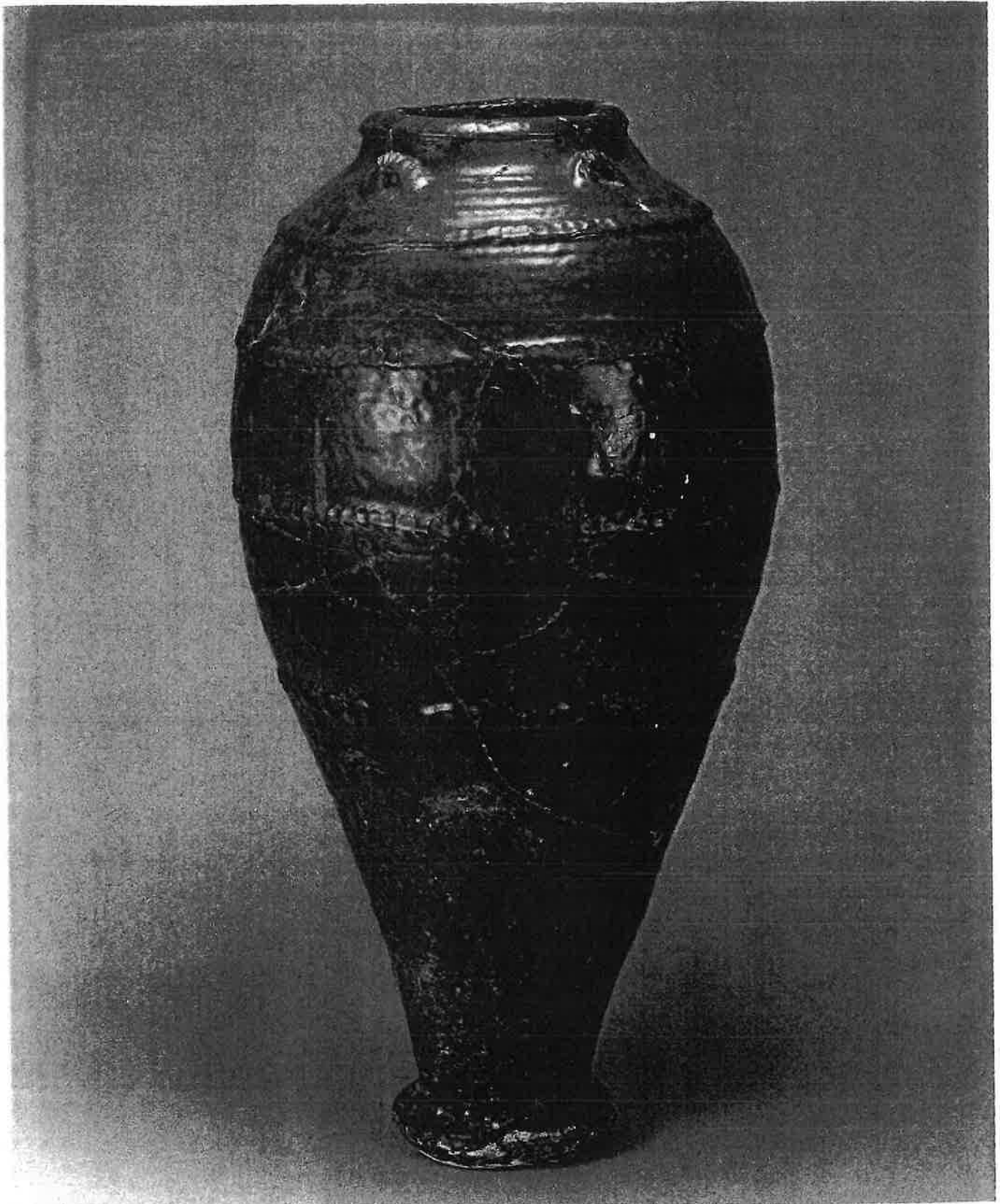


劉華墓 復元展示 福建博物院



青釉四耳壺 劉華墓出土 泉州・海外交通史博物館

海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会, 2008
『東アジアの海とシルクロードの出発点—福建, 貿易都市, 陶磁器, 茶文化—』
国立歴史民俗博物館

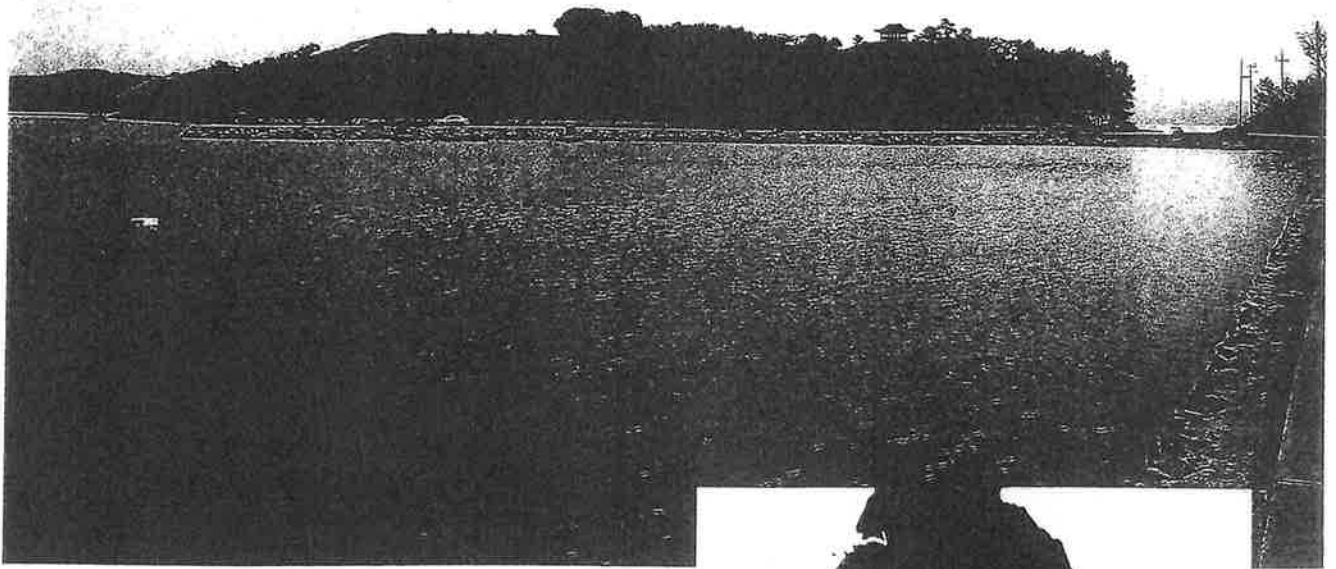


せいゆうしじこ
青釉四耳壺 イラクまたはイラン 10世紀 福州・五代劉華墓出土 高(H)74.5 一級文物

Jar with four handles, blue glaze earthenware. 10th century, Iraq or Iran. Excavated from the tomb (dated 930) of Liu Hua, Fuzhou. Fujian Museum.

肩部には4つの環状の耳、胴部には4条の突帯文をもつ。胴部全体および内面にも口縁部から頸部付近までに青釉が施される。イラクまたはイランで生産された陶器で、ペルシャ湾から中国・日本にいたる海のシルクロード各地の遺跡で類品の破片が出土しているが、完全なものは珍しい。西アジアからの輸出品を入れる容器(コンテナ)として各地に運ばれ

たと考えられている。劉華墓からは同形で文様の異なるものが計3点出土している。(TD)



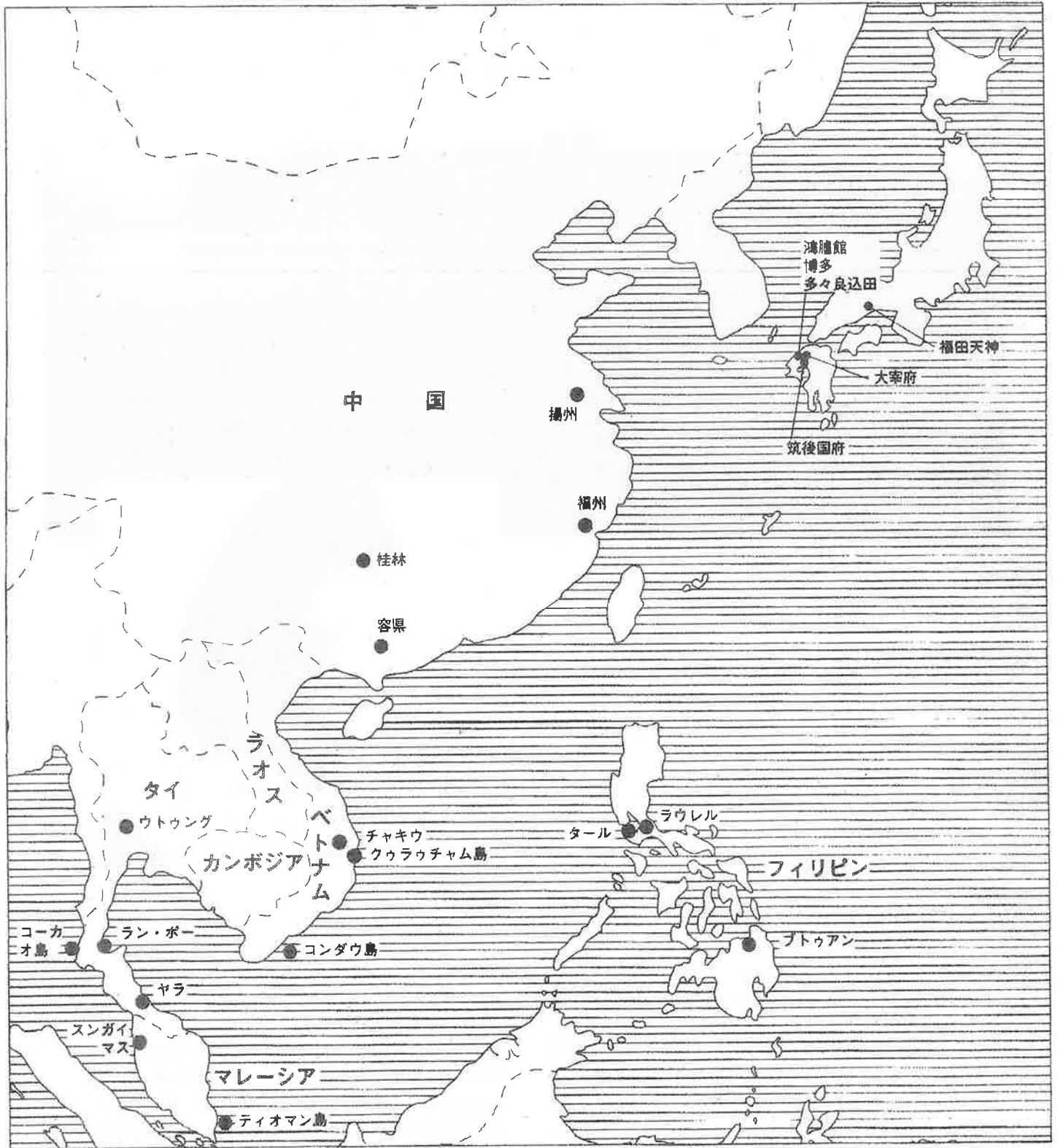
将島全景



海上の王国・張保臯^{チャンボゴ}—韓国・清海鎮遺跡^{チョンヘジン}

張保臯(宝高 790頃~846?)は、韓国南西部の島、将島を拠点として海賊を掃討しながら海上交易権を掌握した人物である。その活動範囲は東シナ海から黄海、南シナ海までおよび、新羅と唐や日本を結ぶネットワークを構築していた。円仁の「入唐求法巡礼行記」によると、円仁が唐から帰国する際には彼らの援助によって帰国できたことが書かれており、また彼の部下が大宰府に来て当時の大宰府の官人と交易を行っていたことが記録に残っている。彼らは丈夫で高速な新羅船をはじめ優れた航海技術を持っていたと考えられ、その能力を武器にして広範囲に交易を行っていたとみられる。張保臯の勢力が拠点とした韓国・全羅南道

莞島郡の将島は島全体が清海鎮遺跡として知られている。調査の結果、海岸には防衛用の木柵が打たれ、内城と外城からなる土塁で構成された城郭や礎石建物などの遺構や、新羅時代の遺物が出土している。出土した遺物は瓦、土器・陶磁器・金属器などで、いずれも張保臯の時代に属するものである。武器・武具も出土しており、張保臯が海軍力も保持していたことを示している。当時の新羅は中国・山東半島の赤山に多数の新羅商人が居留しており、中国との交易を活発化させていた。大宰府や鴻臚館にも中国商人とともに新羅商人が通商を求めて来航していたのは間違いない。



インドネシア スマトラ島沖
黒石号 沈船 東アジア・東南アジアのイスラーム陶器出土地点図

(愛知陶磁資料館 図録 64)